2022年度　ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金募集要項

立教大学ジェンダーフォーラムは、本学女子学生寮であったミッチェル館の理念を引き継ぎ、ジェンダーについての教育・研究活動の拠点として 1998年４月に誕生しました。本奨学金は、本学学部および大学院に在籍する学生で、ジェンダーに関わる活動・研究をした者（団体）、あるいは活動・研究を計画している者（団体）を幅広く対象とします。

（B）活動・研究助成金

対　　象：学部学生・大学院生（個人・団体）
支 給 額：総額20万円
採用件数：1～2件程度
選考方法：書類審査・面接
提出書類：①活動・研究助成金願書＊
②奨学金使途を含む活動・研究計画書（A4用紙３枚程度 書式自由）

面接日時：2022年５月17日（火）の 19時以降を予定。個々の面接時間はあらためて連絡する。
面接会場：ZOOM ミーティングにて実施予定
備　　考：採用者（団体）は活動・研究の中間報告を10月末に提出の上、最終的な報告書または論文を翌年1月中旬に提出すること。提出された活動報告書または論文は、ジェンダーフォーラム『年報』に掲載する。

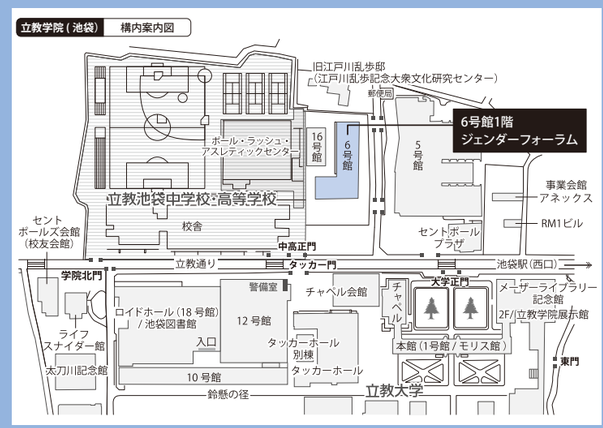
書類提出期間：2022年 4月 1日（金）～ 2022年 4月 30日（土）まで
書 類 提 出 先：ジェンダーフォーラム（gender@rikkyo.ac.jp）に添付ファイルにて提出
採　用　発　表：5月 23日（月）　学生課奨学金掲示板（池袋／新座）、10号館掲示板、立教時間、フォーラム HP に掲示予定
授　　与　　式：5月下旬（予定）

【ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金（A）・（B）の申込書（願書）の利用目的】
標記の申込書（願書）で取得した個人情報は、奨学金採用者（団体）の選考および発表のために利用する。採用者（団体）の論文･報告書等は「年報」に掲載する。また、奨学金制度広報のため冊子、WEB等に採用者名を記載することがある。
以上に同意した上で、申込書（願書）を提出すること。その他、個人情報の取扱いについては、「立教大学プライバシーポリシー：個人情報取扱に関する基本方針」（http://www.rikkyo.ac.jp/privacypolicy/）を参照すること。
※ (A) ジェンダーフォーラム論文賞の募集は10月に行います。詳細や不明な点はジェンダーフォーラム事務局にお問い合わせください。
ジェンダーフォーラム事務局（池袋キャンパス６号館１階）　Tel：03-3985-2307　E-mail：gender@rikkyo.ac.jp
＊申込書、願書はジェンダーフォーラム事務局、学生課窓口（池袋／新座）、独立研究科事務室窓口にあります。ホームページ上からもダウンロードできます。（http://www.rikkyo.ac.jp/research/institute/gender/）

立教大学ジェンダーフォーラムのご案内

「常識」にとらわれず、性差やセクシュアリティ（性自認･性的指向など）についての問題を本音で語り合い、考える場、それがジェンダーフォーラムです。ジェンダー（gender）とは、社会や文化の「常識」にしたがってつくられた性差のこと。「女／男らしさ」「女／男役割」や異性愛を「あたりまえ」とする考え方もそのひとつです。「常識」「あたりまえ」とみなされている性をめぐる社会通念･制度･規範には、一人ひとりの個性的なあり方を抑圧するものが少なくありません。ジェンダーフォーラムは、女子学生寮ミッチェル館（1998年閉館）の精神を受け継ぎ、ジェンダーについての教育・研究拠点として 1998年に誕生しました。ジェンダーに関する身近な違和感をもっている方から学識を深めたい方まで、様々な人に広く開かれています。より多くの人々が、自分自身の問題として社会生活における「ジェンダー」に気づき、理解し、考える契機となるよう、公開講演会やジェンダーセッション、コーヒーアワーなどを開催しています。

開　室　日：毎週月曜日～金曜日
開 室 時 間：10：00～16：00
※新型コロナウィルス対策のため、一時的に開室日時を変更する可能性がございます。詳しくはホームページをご確認ください。
場　　所：立教大学池袋キャンパス６号館１階
TEL：03－3985－2307
E-mail：gender@rikkyo.ac.jp
URL：http://www.rikkyo.ac.jp/research/institute/gender/



詳細は、10号館通路のジェンダーフォーラム掲示板または HP でご覧ください。

GEM

Vol.46 2022.3.31
Rikkyo Gender Forum News Letter

Gender Forum Rikkyo University

Gem とは…命名時には本フォーラムがその精神を受け継いでいる立教大学女子寮ミッチェル館（1998年閉館）の “M” にちなんだものでした（Gender Encountering in Mitchell）。現在はさらなる発展を企図して、ジェンダー平等の実現を目指すことを意味する Gender Equality in the Making とし、ニューズレター、メーリングリストの名前として使用しています。

ジェンダーフォーラム 2021 年公開講演会（2021 年 12 月 7 日（火））

「女の子はどう生きるか、ついでに男の子もどう生きるか ――上野千鶴子氏と立教大生の対話」

登壇者：上野千鶴子氏（東京大学名誉教授、認定 NPO 法人ウィメンズアクションネットワーク（WAN）理事長）

12月７日に開催された公開講演会にて、上野千鶴子氏との対話に参加した。上野氏は、近著『女の子はどう生きるか』（岩波書店、2021年）をテーマにしたご講演ならびに５名の学部生・院生からの質問に答えてくださった。

はじめに、昨今女子の大学進学率は向上しているが、教育課程において無意識のジェンダーバイアスがあることや、女性の達成欲求が冷却化されることについて講義された。医大入試女子差別や都立高入試の男女別定員制は記憶に新しいが、このような不条理なシステムの中で生きざるを得ないのが今の女性の実情である。

私はジェンダーに関する研究をしているが、ジェンダーとは人権であると日々実感する。しかし、それを声高に伝えても「女は男になりたいの?性差はあって当たり前だ」と言われることがある。まるで 2000年代のバックラッシュから時が止まっているかのような質問だ。なぜ未だにこのような質問を浴びせられるのか、そして、答えるのはなぜいつも女性側なのか。彼らに伝わる言葉を持たなくてはならない。こうした思いに明快な答えを示してくださったのが上野氏である。

なぜ女子学生を増やさなくてはならないのか。なぜダイバーシティが必要なのか。その問いに対して上野氏はこう答える。「情報は、ノイズから生まれるから」。学問は、違和感に言語を与えその筋道をつくるものだ。情報を生産することで新たな知が生まれる。ノイズとは、なぜ?という引っ掛かりであり、ノイズを生むためには自分とは異なる人が目の前にいることが欠かせない。家庭、学校、企業と社会には様々なシステムがあるが、自分にとってアタリマエの環境に安住していてもノイズは発生しない。例えば、生後間もない赤ちゃんは、およそ 500万年前の人類誕生時から大きな変化はないという。現代の働く母親は、自動化･効率化の図られた職場とプリミティブな赤ちゃんのお世話という２つのシステムの間を往復する。ここからノイズが生まれないわけがない。女性をもっと活かしてほしい、と上野氏の話はワーキングマザーにも及ぶ。

女性活躍、が叫ばれて久しい。しかし、それは本来女性が求めていた就労とは異なり、単に女性を「労働力」とするものであった。結果的に非正規雇用の女性が増加し、男女間の賃金格差は依然として大きい。日本型雇用慣行はジェンダー構造を内包する。

果たして、この現状は変わるのだろうか?その問いに対して上野氏は「Yes, 私たちが変えてきました、だからあなたにも変えられます」と言う。家庭科男女共修、男女混合名簿、お茶汲み慣行の廃止。それらは「なんで?そんなの変じゃない?」と声を挙げた人、つまりノイズを生む人がいたから変わった。上野氏をはじめとする先の時代の女性たちは、教育の場や家庭でジェンダー平等意識を持った女性たちを育ててくれた。その思いを受け継ぐ時がまさに今なのだと思う。

森　亜由葉（本学大学院 21 世紀社会デザイン研究科博士課程前期課程 1 年）

2021年度映画上映会（2021年10月2日（土））

映画『ひとまずさよなら“ユア ビゲスト ファン”（原題：*Resolving ‘Your Biggest Fan’*）』上映会＋トーク

講師：ステフ・アラナス氏（アーティスト）、秋田祥氏（映画キュレーター）
通訳：佐藤まな氏

10月2日に、ジェンダーフォーラム主催のオンライン映画上映会とトークセッションが行われた。私は学生登壇者として参加した。

上映された作品はステフ・アラナス監督の「ひとまずさよなら“ユアビゲスト ファン”」（原題：*Resolving ‘Your Biggest Fan’*）である。ステフ監督は、フィリピン出身の24歳のアーティスト。彼女の活動は、映像制作、ミュージシャンなど、多岐に渡る（気になる方は是非“Stef Aranas”と検索してみて欲しい）。彼女はトランスジェンダー女性であり、表現活動を通して、トランスジェンダーやクィアの人々の経験や課題に光を当てるアクティビストでもある。

本上映会の作品は、彼女にとって大学の卒業制作のセルフドキュメンタリーだ。しかし、彼女が本来想定していた作品とは大きく違うものである。理由は、新型コロナウイルスの蔓延によるマニラのロックダウン。それにより、計画していた劇映画の撮影ができず、彼女の友人たちとのオンラインでの語りを中心にした作品になった。本作の中心は「どのように卒業制作を作るか」についての友人たちとの話し合いだが、その中では、フィリピン政府の反テロ法に対しての怒り、卒業やその後の進路に関しての不安などを語る場面もあり、フィリピンの政治状況や彼女たちが抱える現状を覗ける作品だった。

ロックダウン中という制限された状況で作られた作品だったため、トークセッションは、大学生たちもこの状況で計画通りにいかないことや現状に対する不安を吐露する場となった。長年計画していた留学に行けない、卒論の実地調査ができない、就活が不安…。フィリピンの大学生も、日本の大学生たちも、先行きの見えない今の状況にそれぞれの不安を抱えているのだ。

しかし、私はそんな状況だからこそ、この作品に出会うことができて幸福だったと思う。なぜならこの作品は、当初の計画から大きく変更しながらも、今できる形でアイディアを練って完成させたものだからである。その姿勢から、自分の課題を諦めず方法を考えてresolving（解決）しよう！という勇気をもらうことができた。

ステフ監督は、今後も自分が創作活動や声を上げることを続けていくことで、世界のトランスジェンダー女性の方々を勇気づけたいと語っていた。私はそんな彼女の活動を追って応援をしていきたい。そして、一人一人がジェンダーやセクシュアリティで悩むことなく、その人らしく生きられる社会の実現のために、私もステフ監督のように自分ができることを考え、実行を続けようと背中を押された。

山口　蒼（本学社会学部現代文化学科4年）

第84回ジェンダーセッション（2021年10月15日（金））

「フェミニズム、クィア、キリスト教」

登壇者：工藤万里江氏（明治学院大学キリスト教研究所客員研究員、本学兼任講師）

2021年10月15日、第84回ジェンダーセッションがZoomで開催された。講師は、明治学院大学キリスト教研究所客員研究員・本学兼任講師の工藤万里江先生。フェミスト神学とクィア神学を手掛かりとして、フェミニズムとクィアの関係性について興味深くご講演をお聞きした。

工藤氏は、「フェミニズムは古く、クィアは新しい」という議論は確かに存在すると指摘しつつ、しかし、クィア・アクティビズムやクィア理論が取り組んできた課題は常にフェミニズムが取り組んできた課題でもあり、両者は新旧や優劣によって簡単に切り分けられるものではない。いや、むしろ両者は不可分な存在であることを強調する。

フェミニズムとクィアの差異を両者の射程の広さに看取する認識についても、工藤氏は注意を喚起する。工藤氏はフェミニスト神学やフェミニズム一般が本質主義的な男女二元論を内包している事実をつまびらかに指摘しつつも、その同じフェミニズムの中で、「男／女」をはじめとする二元論的思考への抵抗や「女とは誰か」という問いへのチャレンジが常に繰り返されてきたことも確認された。「男女」間の不平等に抵抗しようとすれば、必然的にそもそも「男」や「女」とはなにかという基本的な問いにつながる。また、社会的な性別役割に疑問を呈していけば、究極的には生物学的・解剖学的な身体の違いに帰着しない、より根源的な問いが生まれるはずだと工藤氏は言う。これらの気づきは、自らを無意識的に絡め取っていた因習的な固定観念に自覚的に向き合う機会を与えてくれた。

講演中に取り上げられたエリザベス・スチュアートと工藤氏自身の議論からは、「権力構造にこだわり、どう対抗していくか考え続ける姿勢」としてのクィアの重要性を教えられた。その意味でクィアは常に考え続ける。その射程は決して偏狭ではなく、分野横断的である。いわば、フェミニズムやクィアはセクシュアリティ以上のものに向き合い続ける姿勢である。あるものに対する共通の抵抗力や両者の内での連帯・それのみならず地球との連帯の意識は、フェミニズムやクィアが単に性規範などに限定されないことを意味している。

これからの時代を生きる私たちは、ジェンダーの問題についてうそぶくことはできない。因習的で意固地な姿勢ではなく、目前にある差別や抑圧と向き合わなければならない。それは、そこにジェンダーやセクシュアリティがいかに深く関わっているかに自覚的になることでもあると言えよう。けれども、そこには困難が伴う。なぜなら、自己を深層において問い続け、また世界や社会を問うことでもあるからだ。ときには、自身に対する痛烈な批判に耳が痛いこともある。キリスト教自体に対する内省批判も然りである。キリスト教はある面ジェンダーやセクシュアリティに対する差別や抑圧の原因となりながら、同時に、それと向き合う者たちの推進力にもなってきた。そのような逆説と両義性への認識を促してくれたのも、この講演であったように思う。大変貴重な講演をいただいた講師に改めて感謝申し上げたい。

川島創士（本学大学院研修生）

第85回ジェンダーセッション（2021年11月17日（水））

「小さなメディアとフェミニズム」

登壇者：野中モモ氏（ライター、翻訳家、Lilmag店主）

ジェンダーセッションで野中モモさんがお話されると知り、あわてて申し込んだのは当日の朝。夕方仕事を終えてダッシュで帰宅し、すべり込みセーフでセッションに入ると、画面に映る野中さんの背後には本がいっぱいの書棚。おもしろい資料をたくさん持っている人のお宅におじゃましたときのようにわくわくしながら、お話に耳を傾けた。

ZINEと長く、深くかかわってきた野中さんによれば、ZINEとは「個人または少人数の有志が非営利で発行する自主的な出版物」だという。そうしたZINE概念の変遷や、ZINEそのものがたどってきた歴史は、印刷技術の民主化とサブ／カウンターカルチャー、とくに70年代からのパンク・カルチャーと深く関連している。しかし、近年はそうした「正史」の見直しも進んでいるという。サブ／カウンターな動きの中にも、権利のためにたたかうマイノリティーの内部にも差別や排除はあった。ZINEは、そうしたアイデンティティ・ポリティックスの中で居場所を持てない人が、どこにいるかわからない仲間に自分の声を届けるためのメディアとしても重要な役割を果たしてきたのである。また、DIY(Do-It-Yourself)の精神を体現するZINEは、インターネットが大企業に支配されるようになった今、その魅力が再発見されているという。自分のメッセージを、自分で納得のいくモノに仕上げ、自分で決めた部数だけ発行する。Lilmagのようなお店で売ってもらってもよいし、ジンスタ（zinester）が集まる場で手渡ししてもよい。きれいでなくても、つまらなくてもいい。どんなにとんがった表現にも、どんなにはみ出した人にも、きっと受け手や居場所がある――ZINEはそうした希望をつなぐメディアなのだろう。それと同時に、網羅性や体系化への試みをすり抜けるZINEの多様さそれ自体に、ZINEを作ることすらできないつらさを抱えて生きる人びと、ZINEという声をまだ持たぬ人びとの存在を感じさせる力があることを再確認できた。

私は仕事上28万点ほどの「ミニコミ」のお世話をしているのだが、人びとが作ったものを読んでいると、誰かと出会ったときのようにあたたかい気持ちになる。それと同じあたたかさを、野中さんのお話から、画面に次々と示されるZINEから、そして司会や参加者とのやりとりからも感じた90分だった。

平野　泉（本学共生社会研究センター）